

むかし、ある男の人が、お嫁さんよめをもらいました。ところが、このお嫁さんは、二日たつても、三日たつても、ものをいいませんでした。四日たつても、十日たつても、ひとこともしゃべりません。男の人は、

「そんなにものをいわないなら、もう家に帰ってくれ」といいました。

男の人は、お嫁さんを送って行きました。山の中まで来たとき、キジが一羽、ケーン、ケーンと鳴いて飛びたちました。すると、猟師りやうしが、鉄砲てつぽうでぽーんとキジを撃うちました。それを見て、お嫁さんは歌をよみました。

「ものをいうまい ものいうたために 父は長柄の人柱 鳥も鳴かねば 撃たりよまい」

男の人は、

「なんと、あんたは、ものがいえるんじゃないか」といって、お嫁さんを連れてもどり、

「いったいどうして、今まで黙だまっていたんだ」とたずねました。

すると、お嫁さんはいいました。

「じつは、わたしのお父さんは、長柄の川の橋をかける仕事に行っていました。長柄の橋は、雨が降ふったらすぐに流されてしまいます。どうしたら、橋が流されずにすむだろうと、みなで考えていたときに、人柱を立てようということになりました。それでは、だれが人柱になるか。みんなやがりました。すると、うちのお父さんが、『それなら、ステテコに一番大きなつぎが当たっている者にしよう』といました。調べてみたら、お父さんのに、一番大きなつぎが当たっていたのです。そこで、お父さんが人柱になって、橋のたもとにうめられてしまいました。それからは、いくら大雨が降つても、橋は流されなくなりました。お父さんは、自分がいい出したために命いのちを取られました。それからは、わたしは、ものをいわなくなったのです」

おしまい

村上郁再話

資料『丹後伊根の昔話』京都府総合資料館